

2. 日本語について知る

1. 日本語母語話者の多くは日本語文法を知らない！？

現代日本語文法は、たとえば英文法やロシア語文法のように、必ずしも、普遍的、体系的なものとして、きちっとしたかたちで確立しているとは言えません。高等学校までの、とくに中学校の国語科において教えられている「国文法」は、英文法などの欧米の言語の文法をもとにして作られたもので、英語などのヨーロッパの言語と構造が著しく異なる言語である日本語の文法的な特徴を十分に説明できるものではありません。しかし、日本語母語話者は、もともと文法的知識があろうとなかろうと、日本語を自由に話してきたので、学校で教えられる文法が日本語の特徴をわかりやすく説明できないものであったとしてもとくに問題にはなりません。ところが、第二次世界大戦後しばらくしてから、おそらく 1970 年代以降、日本に多くの外国人留学生や外国人労働者とその家族がやってくるようになって、彼らに日本語を教えるための日本語学校や日本語教室があちこちにでき、また大学では外国人留学生のための日本語の授業が開講されるようになりました。それらの日本語教育の実践の場で、日本語教師たちの多くが、外国人に日本語を教えるときに自分たちが中学や高等学校で教えられてきた文法の知識では、日本語の文法的な特徴を外国人たちによく説明できないことに気づき始めました。日本語母語話者は、本当の日本語文法を実は知らないのです。

2. 日本語の発音

日本では、小学校の国語の授業で「ひらがな」「カタカナ」を五十音図というもので学びます。そのことを通じて日本語母語話者は日本語には 50 の音があるのだと思っています。しかし、よく考えると、「ガ」「ギ」「グ」などの濁音、「パ」「ピ」「プ」などの半濁音、「キャ」「キュ」「キョ」などの拗音があることに気づき、いったいいくつの音があるのだらうと、わからなくなってしまいます。また、「キェ」「ミェ」などは、日本語の標準語（東京方言）には存在しない音素ですが、外来語や日本語の方言の表記のために用いられており、日本語の標準語にはいくつの音素があるのか、あいまいです。

他方、外国人にとって、日本語はどのように聞こえているのでしょうか。その一つの手がかりは、日本語のローマ字表記です。日本語のローマ字表記は、アメリカ人宣教師のジェームス カーティス ヘボン（James Curtis Hepburn, 1815 年 3 月 13 日～1911 年 9 月 21 日）が和英辞典「和英語林集成」をつくるために考え出したものが最初のもので言われています。その表記を「ヘボン式」と言います。ヘボンは米国人ですから、日本語の「ヘボン式」ローマ字表記は、英語話者の立場から考え出されたものと言ってよいでしょう。「ヘボン式」表記では、たとえば、「サ行」は〈s〉と〈sh〉という 2 つの子音が、「タ行」は〈t〉〈ch〉〈ts〉という 3 つの子音が、「ハ行」は〈h〉と〈f〉という 2 つの子音が混ざっています。つまり、ヘボンは、日本語の「サ行」音から 2 種類の子音を、「タ行」音から 3 つの子音を、「ハ行」音から 2 つの子音を聞き分けていたことがわかります。これらのことは、日本語を「ヘボン式」でローマ字表記することが多いので、多くの日本語母語話者が気づいています。

しかし、「ん」に〈n〉と〈m〉の 2 通りの子音があてられていることは、あまり知られていません。日本語母語話者の多くは、「ん」の音はひとつしかないと思っているのですが、ヘボンは「ん」の 2 種類の子音を聞き分けていたわけです。しかも、これは表記の問題ではなく、発音の問題なので、やっかいです。たとえば、「本（ほん）」という言葉の「ん」は、ヘボン式では、「本棚（ほんだな）」のときには〈hondana〉となって〈n〉と表記されるのですが、「本箱（ほんばこ）」のときには〈hombako〉となって〈m〉と表記されます。つまり、ヘボンには、「本（ほん）」という日本語は、「本棚」と言うときと「本箱」と言うときで「ん」の音に違いがあると感じられたのです。確かに違うようです。ウソだと思ふなら、「本棚」と言うつもりで「本」で止めたときと、「本箱」と言うつもりで「本」で止めたときの唇のかたちがどうなっているか確かめてみてください。「本棚」の場合は上唇と下唇が離れているのに対して、「本箱」の場合はくっついていますね。ヘボン式では、撥音（ン）は〈n〉で表しますが、次に続く子音が〈b〉〈m〉〈p〉のとき、〈m〉と表記するのです。

しかし、以上のことは、日本語話者にとって、これは発音の問題と言うより、表記の問題のようにも思えます。こうして、日本語話者にとって、日本語は、どの程度まで表記通りに、あるいは綴り通りに発音する言語なのかどうかということが気になってきます。この、日本語は表記通りに発音されているのかどうかということは、日本語母語話者には、気づきにくいことだと思われるかもしれませんが、注意深く聞いていると、日本語は必ずしもすべて表記通り、あるいは綴り通りに発音されていない言語であること、つまり同じ綴りでも同じように発音されないことがある言語であるということに気づきます。

たとえば、母音の〈i〉〈u〉は、無声子音〈k〉〈ky〉〈s〉〈sh〉〈t〉〈ch〉〈h〉〈f〉〈hy〉〈p〉〈py〉に挟まれたとき、文末にあるとき、無声化または脱落しているように聞こえます。とくに〈u〉は無声化というより脱落しているように聞こえます。たとえば、「薬（くすり）」は〈kusuri〉ではなく〈ksuri〉と、「ネクタイ」は〈nekutai〉ではなく〈nektai〉と、「7 時（しちじ）」は〈shichiji〉ではなく〈shchiji〉と、「～です。」は〈desu〉ではなく〈des〉と発音されているように聞こえます。こうした発音を外国人は聞き取りにくいと感じるようです。ちなみに、この現象は、関西方言には起きないので、アクセントや語彙の違い以外で、関西出身者を容易に見いだすことができます。

3. 日本語文法的一端

3.1. 「ている」

日本語に頻出する「～ている」という表現は、英文法なれしている（ここにも出てきました）、すぐに現在進行形だと思いがちですが、「車が止まっている」とか、「父はもう家に帰っている」というのが現在進行形でないのは明白です。「車が走っている」は現在進行形のようなので、「～ている」という表現が現在進行形を示すことがあるのは事実ですが、「止まっている」というのは、どう考えても「止まりつつある」という意味ではなく、車の止まった状態が持続していることを示しています。状態を示すと言ってもいいでしょう。「父はもう家に帰っている」も、やはり状態を示しているようです。「窓が開いている」も同様で

す。進行形か、状態の持続かの違いは、動詞の性質によります。つまり、日本語の動詞には、「～ている」が進行形を示す継続動詞というグループ、すなわち「歌っている、書いている、読んでいる、降っている」というような動詞のグループと、瞬間のうちに事態が推移するために進行形になりえず、その動作の結果の状態の持続を示す瞬間動詞というグループ、すなわち「消えている、ついている、倒れている、とれている」というような動詞のグループがあると考えられています。

3.2. 「連体詞」と「形容動詞」

国文法は、〈小さな〉〈大きな〉〈わが〉〈この〉〈その〉〈あの〉〈どの〉などを連体詞としていますが、〈小さな〉〈大きな〉は形容詞連体形の特異な変化形と思われますし、〈わが〉は「わたし」あるいは「われわれ」を意味する古語の代名詞「わ」に、同様に古語の連体修飾語を示す格助詞「が」がついたもの、〈この〉〈その〉〈あの〉〈どの〉は、古語の指示代名詞「こ」「そ」「あ」「ど」に連体修飾語を示す格助詞「の」がついたものであり、「代名詞＋格助詞」としてさらに品詞分解ができますから、連体詞という品詞を立てること自体に疑問があります。また、「静かだ」などの形容動詞も、「美しい」などの形容詞とは別の変化形を持つ形容詞と考えたほうがわかりやすいかも知れません。

3.3. 「は」と「が」

「私は上野です」と「私が上野です」は同じ意味でしょうか。もし同じ意味であるならば、なぜ2通りの言い方があるのでしょうか。よく考えてみると、やはり違いがあるようです。なぜなら、こういうシチュエーションでは「私が」を使えない、使うと変な感じがするシチュエーションがあるからです。たとえば、話し手は、聞き手がその話し手と初めて会って、話し手についてまだ何も知らないと思われるとき、「私は〇〇です」と自分の姓を名乗るようです。他方、聞き手のあいだに自分について何らかの情報が事前に流されていて、たとえば、「今度、うちの学校に上野という名前の新任の先生が着任したらしいけど、どんな先生なんだろうね」といったような噂が流れていることがあらかじめわかっているとき、「私が（その噂の）上野です」と名乗ることがあるようです。つまり、「は」と「が」の使い分けは、既知情報の有無と関係があることがわかっています。

実は、この問題は、外国語の翻訳のときに、重要な問題となります。英語の定冠詞〈the〉は、この「は」と「が」の違いに関係する、既知情報の有無と、やはり関係しているからです。既知情報があるときには〈the〉を使うというのが、〈the〉の用法のひとつです。ということは、変な英語ですが、〈This is the pen.〉は、「これはそのペンだ」ではなく、「これがそのペンだ」と訳したほうが、いい訳なのかもしれません（このペンは、彼が彼女から誕生日のプレゼントにもらった、噂の高級ブランドのペンなのです）。

そんな「は」と「が」が、一緒に登場する文が日本語には頻出します。「象は鼻が長い」、「僕は彼女が好きだ」、「私はコーヒーが飲みたい」、「今日は天気がよい」、「東京は人が多い」。この日本語を、英語やロシア語ではなんと言いかを考えると、英語やロシア語では、主語は、日本語の「は」の前の単語である場合もあるし、そうでない場合もあることに気づきます。英語では、不思議なことに、「今日は天気がよい」を言おうとすると、〈It's fine day today.〉となり、〈it〉という、日本語には存在しない主語を持ち出したりさえします。英語は、とにかく主語がなければならない、言ってみれば主語がメインの言語ですが、他方で、ロシア語は〈Сегодня хорошая погода.〉と言い、сегодняは英語のtodayと同様に副詞ですので、主語がなくても構わない言語だということに気づきます。他方、日本語は、「どれが主語？」という言語です。外国語を日本語に翻訳するときは、この日本語の日本語らしい特徴を活かすことが必要であり、逆にそのことに無頓着だと一見したところ日本語に見えるけれど、日本語ではそんな言い方はしない日本語もどきの悪訳ができます。The Beatlesに、〈And I love her〉という曲がありますが、「恋に落ちたら」という邦題はともかく、「そして私は彼女を愛している」というのは、翻訳された日本語としては存在が許されるかもしれませんが、日本人が書いたり話したりする日本語ではありえません。「あの子が大好き」といった訳が、日本語としては自然な文でしょう。

〈Мне нравится Москва, потому что это мой родной город.〉の訳は、たとえば、「私はモスクワが好きです。モスクワは私が生まれた町だから」となります。このように、日本語では、「は」と「が」が同時に使われることがたくさんあるのです（この文もそうです）。

〈Скажите, пожалуйста, какой фильм идёт сегодня вечером?〉は、①「すみません、今日の夕方はどんな映画が上映されるのですか?」とか、②「すみません、今日の夕方はどんな映画をやるのですか?」などと訳しますが、①の訳では「は」「が」が両方出てくるパターン、②の訳は、ロシア語では主語となっている「映画」を、訳では目的語にして、「やる」あるいは「上映する」という動作の主体、つまり英文法やロシア語文法で「主語」と言っているものが省略されたかたちになっています。どちらの文も、「夕方は」はもちろん動作の主体ではありませんから、英文法やロシア語文法でいう主語ではありません。